

行為の価値は心掛の如何に由る

2018年度広島教区のテーマ「福音を伝える使命～預言職・宣教」

・「信徒はまた、自分たちの預言者的使命を福音宣教、『すなわち、生活のあかしとことばをもってなされるキリストの宣教』によっても遂行します。信徒による『この福音宣教は、世間の普通の生活の中で行われること自体から、ある特別の性格と特別な力を獲得します』。(第二バチカン公会議「教会憲章」35)

『行為の価値は心掛の如何に由る』

世には自分の平生の行と聖人達の驚くべきそれとを見くらべて、自分のは如何にもつまらないものゝ如く考える人もあるが、實は決してそうした譯のものではない。たとえありふれた平常のことではあっても、主の爲にという意向を立て、主の御望であり、御計らい下さった所だから、という理由によって行いさえすれば、拙らない事というのは一つもない。否、心掛け次第では、農夫や漁人や、商人、職工やの卑しい業が、司祭とか修道者とかの高い行よりも、却って価値あることすら無きにしも限らない。

思うに現世は廣大な舞臺のようなもので、人は皆この舞臺に立って、それぞれに割当てられた藝を演じて居る。そして舞臺の上では、王様になって拙い藝を演ずるよりは、乞食となって巧くその役を勤めた方が、やんやと持囃される。天主の御前に於いてもそれと同じで、努める藝題は何であろうと、演技さえ巧ければきっと喝采される。農夫だから駄目だ、漁人だから聖旨に適えないなんて云うことは決して無いのである。

『些細な行為でも積み積れば偉い行爲となる』

なるほど聖人達の中には、偉い大きな事を果した御方が少なくはない。然し如何なる聖人でも、朝から晩まで人目を驚かすような事ばかりをして居たわけではない。一つの驚くべき事をする中には、百も千も普通の事をし給うのであった。考えて見るがよい。商人だつて一度に大金を儲ける様な機会には容易に廻り合わない。それでどうするかと言えば、毎日少しづつ儲けて、それが積み積もって大きな金となるのである。善を行い、徳を積むのも道理はそれと同じで、今日では宗教の為に監獄に繋がれるとか、水責火責に遭うとか云ふことはあり得ない。でもめいゝゝの職務を全うするが為の苦勞は、些細は些細でも、それが一生涯續くのである。殉教者の如くただ二三ヵ月の間、監獄に繋がれるとか、五六時間火水に責められるとか云うのでなく、謂わば一生の間、小さな針でチクゝと刺されて殉教するようなものである。一つ宛について見ると、全く取るにも足りない位だけれども、それが毎日の事だから「塵も積もれば山となる」で、人目を驚かす様な偉い徳行を、時たま行ふよりも、却って大きな手柄となるのである。

(「基督信者寶鑑」 浦川和三郎 明治四十四年初版)